

日曜日

ホフマン・フォン・ファラースレーベン 詩

日曜日がやってきた
帽子に花飾りをつけて
眼差しはやさしく明るい
日曜日はみんなと仲良くしたい

日曜日は山に登り
谷を巡り
誰かれとなく
お祈りに招く

今日は老いも若きも
きれいな服で着飾っている
日曜日はみんなのために
野原や森を美しく飾ってくれる

日曜日がみんなに
喜びと安らぎを運んでくれるのだから
あなたも会う人ごとに、親しみを込めて
「こんにちは！」と呼びかけて

ジプシーの歌 1

エマヌエル・ガイベル 詩

軍隊に入ったジプシーの少年が
支度金を持って逃げた 明日はきっと首をくくられるだろう

奴らはおれを牢獄から引っ張り出して、ロバに乗せた
そしておれの肩を鞭で打った 行く道には血が滴り落ちた

奴らはおれを牢獄から出して、広っぱで突き飛ばした
おれはとっさに銃をつかんで、奴らに一発お見舞いしたのさ

眠りの精

ヘルマン・クレトケ 詩

やわらかな底革のついた
かわいいブーツをはき
眠りの精は小さな袋をかついで
しゅっと、すばしこく階段を上る
そして部屋に入っていくと
子どもたちがお祈りをしているところ
眠りの精は袋の中から砂をふた粒ずつ取り出して
子どもたちの目にふりかける
すると子どもたちは一晩中ぐっすり眠れるんだ
神様と天使に守られて

袋の中から砂をふた粒ずつ取り出して
眠りの精は子どもたちの目にふりかける
いい子たちが
楽しい夢を見られるようにと
さあ、もう袋と杖を持って
階段を大急ぎで下りなくちゃ
いつまでもぐずぐずしてられない
今日はまだ行かなきゃならない所がたくさんあるんだー
おや、子どもたちはもうこっくりして夢の中で笑っている
袋を開けたばかりなのに

牛飼いの別れ (ヴィルヘルム・テル*より)

フリードリヒ・フォン・シラー 詩

アルプスの草原よ、さようなら
日当たりの良い牧場よ、さようなら！
牛飼いは行かなくてはならない
夏は終わったのだから

僕らは山に登る でも、またここへやって来る
カッコウが鳴き、大地が歌うように目を覚ます頃
花々があたりを新しい色に染める頃
泉が音をたてて流れる爽やかな五月に

アルプスの草原よ、さようなら
日当たりの良い牧場よ、さようなら！
牛飼いは行かなくてはならない
夏は終わったのだから

*ヴィルヘルム・テル

スイスの伝説的人物ヴィルヘルム・テル（ウィリアム・テル）の物語をシラーが戯曲にした。

ゆきのすず

フリードリヒ・リュッケルト 詩

きのうはまだ花びらのように
空から舞い降りていた雪が
今日はすずのようなしずくになって
細い茎から滴っている
静かな林にゆきのすずが鳴る
あれは何の合図？
ああ、すぐに来て！
春が始まる合図なのよ
ああ、早く芽を出して花を咲かせて！
まだ眠っているの？
何もかも春の清らかな装いになっていくわ
遅れないで出てきて！

春だ

エドゥアルト・メーリケ 詩

春がまたやって来て
青いリボンを風にはためかせ
甘いなじみ深い香りを
予感に満ちて大地に漂わせる
すみれは早く咲きたくて
その日を夢に描いている
ほら、ハーブの音が聞こえる！
春よ、おまえなんだね！
私にはわかったよ！

ブラームス

まどろみは一層浅く

ヘルマン・フォン・リング 詩

まどろみは一層浅くなり
憂いだけがベールのように
震えながら私を覆っている
よく夢であなたの声を聞く
私の戸口の前で呼んでいるのを
誰も見ていない、あなたは扉を開ける
私は夢から醒める、そして激しく泣くのだ

そう、私は間もなく死ぬのだろう
あなたは別の人に口づけするだろう
私が青ざめ、冷たくなったならば。
五月の風がそよぐ前に
森でツグミがさえずる前に
あなたはきつともう一度私に会いに来てくれる
ああ、来てください、すぐに！

僕の恋は緑

フェリックス・シューマン 詩

僕の恋はリラの茂みのように緑
僕の恋人は太陽のように美しい
太陽の光はリラの茂みの上に降り注ぎ
香りとの上ない喜びで満たす

僕の心はナイチンゲールの翼をもち
花盛りのリラの中で揺れ動く
香りに心奪われ、歓呼して歌うのは
数知れない愛の陶酔の歌

セレナーデ

フランツ・クーグラール 詩

月が山の上に昇り
恋人たちには好都合
庭では泉の音が聞こえるばかり
あたりは静まりかえっている

影になっている城壁のそばでは
学生が三人
フルートとヴァイオリン、そしてツイターを
奏でながら歌っている

その響きは美しい人の夢に
そっと忍び込む
彼女は金髪の恋人を見つめてささやく
「私をわすれないで」と

甲斐なきセレナーデ

下ライン地方民謡

こんばんは、いとしい人
こんばんは、僕の可愛い人
君への愛情ゆえにやって来ました
どうか扉を開けてください
どうか開けてください！

わたしの扉は閉まっているの
あなたを入れてあげないわ
ママが鋭く忠告してくれたの
あなたをすんなり入れたりしたら
わたしはもうおしまいだって

今夜はひどく寒くて
風も氷のように冷たい
僕の心が凍りついたら
君への愛も消えてしまいます
どうか開けてください、僕の可愛い人！

あなたの愛なんて
消しちゃいなさいよ
ずっと消したままでいいわ
お家に帰って休むことね
おやすみ、わたしの坊や！

夜の紡ぎ部屋では
娘たちは歌いながら紡ぎ
村の男たちは楽しげに笑う
紡ぎ車は何とすばやく回るのだろう！

どの娘も紡ぐのは花嫁衣裳
それを恋人は喜んでいる
婚礼の鐘が鳴るのは
そう遠くない日

でも、私に親切にしてくれたり
気にかけてくれる人などいない
こんなにも辛いのを
誰にこぼせばいいの？

涙がとめどなく
頬をつたう
何のために糸を紡ぐの？
私にもわからない！

永遠の愛について

ヴェンド族の詩（西スラブ）
ヨーゼフ・ヴェンツィヒ ドイツ語訳

森も野原も何と暗いのだろう！
すっかり日は暮れ、あたりは静まりかえっている
家々の灯りも煙も見えず
ひばりのさえずりも聞こえない

若者が村からこちらに向かって来る
彼は恋人を家に送るところ
柳の茂みのそばを連れ立って歩きながら
たくさんのことを話している

「僕のことで君が侮辱されて
苦しんでいるなら
この愛はすぐさま引き裂かれるだろう
僕たちが結ばれた時のように、すぐさま
別れよう、雨とともに、風とともに
僕たちが結ばれた時のように、すぐさま」

彼女は昂然と言った
「私たちの愛は決して引き裂かれはしません！
鋼は堅く、鉄もとても堅い
けれども私たちの愛はもっと堅いのです
鉄も鋼も形を変えられるけれど
私たちの愛を誰が変えられるでしょう？
鉄も鋼も溶かすことができるけれど
私たちの愛は永遠に変わらずに続くのです！」

1. さあ、ジプシーよ

さあ、ジプシーよ、弦をかき鳴らせ！
薄情な娘の歌を奏でるんだ！
悲しく狂おしいほどに弦を泣かせ嘆かせるがいい
この頬を熱い涙が濡らすまで！

2. 高く波立つリマ川よ

高く波立つリマ川よ、おまえは何て暗く濁っているんだ
僕は岸辺で嘆き悲しんでいる、君のことを思って！
波は流れ去っては戻り
岸辺の僕のところへどっと押し寄せてくる
リマの岸辺で永遠に泣かせてほしい、君のことを思って！

3. 僕の彼女が一番きれいなのは

僕の彼女が一番きれいなのは
いつだかわかる？
それはチャーミングな唇が
ふざけて笑ってキスする時
可愛い人
君は僕のもの
心からの
キスを！
天は僕だけのために
君を創ってくれたんだ！

私が彼のことを一番好きなのは
いつだかわかる？
それは私に腕をからませて
抱きしめてくれる時
大切な人
あなたは私のも
心からの
キスを！
天は私だけのために
あなたを創ってくれたのよ！

4.神様、ご存知ですね

神様、ご存知ですね 私がどれだけ悔やんだか
恋人に一度口づけしたことを
心が命じたんです 彼に口づけしなさいって
生きている間ずっと、あの初めての口づけを忘れないでしょう

神様、ご存知ですね 静かな夜に
何度、恋人のことを思って喜んだり悩んだりしたか
愛は甘い、たとえ苦い後悔があっても
私の哀れな心はずっとずっと彼に誠実でいます

5.日焼けした若者が

日焼けした若者が踊りに誘う
青い目のきれいな娘を
拍車*を勢いよく鳴らすと
チャルダッシュのメロディーが始まる
可愛い小鳩にキスして、抱きしめて
回しながらリードしては歓声をあげて跳び上がる
グルデン銀貨を三枚ツィンバロンに投げると
音が響き渡る

*拍車

乗馬の際に靴のかかたとに装着する馬を御するための
道具。ハンガリーの民族舞踊のブーツには、元々は
拍車が付いていたと思われる。

6.真っ赤なバラが三本

真っ赤なバラが三本、並んで咲いている
男が娘の所へ行くのは禁じられない！
神よ、もしそれが禁じられていたら
広い世の中はとっくになくなっていたらろう
独り身でいることは罪ではないだろうか！

ケチュケメト*はアルフェルド**で一番美しい街
そこにはお洒落で感じのいい娘が大勢いる！
友よ、そこで花嫁を探すんだ
プロポーズして家庭を作って
喜びの杯を飲み干すんだ！

*ケチュケメト

ハンガリー中部の都市。大平原上にある。

14世紀から都市的特権を得て、主に農業で栄えた。

**アルフェルド

ハンガリーの大平原。ドナウ川の東に位置する。

7.時々は思い出しますか？

時々は思い出しますか？

愛しい人

私に神聖な誓いを立てたことを

裏切らないで、捨てないで

あなたにはわからないのですね、私がどれほど愛しているか

愛してください、私があなを愛するのと同じくらい

そうしたら神の恵みがあなたに降り注ぐでしょう！

8.赤い夕焼け雲が

赤い夕焼け雲が

天空を流れる

憧れに満ちて君の方へ、愛する人よ

心は燃えている

天は赤々と壮麗に輝き

僕は昼も夜も夢に見る

愛する君のことだけを

マーラー：民謡詩集「子どもの不思議な角笛」による歌曲

うぬぼれ 歌曲集「若き日の歌」より

僕は自分のことがわからない！

病気じゃないけど健康でもない

傷を負ったはずなのに傷口がない

僕は自分のことがわからない！

食欲があってもちっともおいしくない

お金があっても何の値打もない

僕は自分のことがわからない！

そのくせ、かぎタバコのひとつまみも持っていない

小銭さえポケットに入っていない

僕は自分のことがわからない、自分のことが！

結婚だっはずっとしたいと思ってる

だけど赤ん坊の泣き声を聞けるはずもない

僕は自分のことがわからない！

今日、ようやく医者に聞いてみた

すると医者は正面切ってこう言った

「わたしには君のことがよくわかる、よくわかるとも

君は正真正銘のバカ者だ！」

やっと僕にも自分のことがわかった

やっと僕にも自分のことがわかった

「君は正真正銘のバカ者だ！」

やっと僕にも自分のことがわかった

やっと僕にも自分のことがわかった！

夏の交代 歌曲集「若き日の歌」より

カッコウは木から落ちて死んだ 落ちて死んだ
緑の牧場で！牧場で！
カッコウは死んだ！死んでしまった！
木から落ちて死んだ！

それなら、夏の間じゅう
私たちの暇をつぶしてくれるのは誰だろう？
そう、それは緑の小枝にとまっている
ナイチンゲール夫人！

小柄で上品なナイチンゲール
やさしくて愛らしいナイチンゲール！
彼女はいつも元気に歌ったり踊ったりしてくれる
ほかの鳥が黙ってしまった時でも！

私たちは、緑の森に住むナイチンゲール夫人を
心待ちにしていた
カッコウの季節が終わると
ナイチンゲールがさえずり始める！

ラインの伝説 歌曲集「子どもの不思議な角笛」より

時にはネッカー川のほとりで
時にはライン川のほとりで草を刈る
時には恋人と一緒に
時には一人で

草刈りが何の役に立つだろう
もし鎌が切れなかったら
恋人が何の助けになるだろう
もし僕のそばにいなかったら！

だからネッカーやラインの川岸で
草を刈るなら
僕の金の指環を
川に投げ入れるのさ！

指環はネッカーを流れ
ラインを流れる
漂いながら下って
海の底へたどり着く

そして、とうとう指環は
魚に食べられてしまう
魚はきっと
王様の食卓にのぼるはず！

王様はお尋ねになる
この指環は誰のものかね？
すると僕の恋人は答える
「その指環は私のものでございます」

恋人は跳ぶように
山を登っては下って
僕のところを持ってきてくれる
素敵な金の指環を！

ネッカー川のほとりで草を刈るなら
ライン川のほとりで草を刈るなら
さあ、君の指環を
川に投げごらんよ！

高き知性への賞賛 歌曲集「子どもの不思議な角笛」より

昔あるとき、深い谷間で
カッコウとナイチンゲールが
親方検定のための歌で
さえずりの競争をした
芸術と幸運で勝る者は
褒美も手にするだろう

カッコウは言った「君がよければ
審判官を選んだんだけど」
そして、すぐにロバ殿を指名することにした
「ロバ殿には二つの大きな耳がある
大きな耳が、大きな耳が
だからその分よく聞き取れて
何が正しいかをよく心得ているに違いないから！」

カッコウとナイチンゲールは、さっそく審判官の前へ飛んで行った
事情を話すと
ロバ殿は、歌うようにと命じた
ナイチンゲールは感情を込めて愛らしく歌った！
ロバ殿曰く「おまえはわしを混乱させる！
頭がぐちゃぐちゃになるわい！イーヤア、イーヤア！
わしにはさっぱりわからん！」

カッコウは素早く歌い始めた
お得意の3度、4度、5度の音程で
ロバ殿はそれが気に入ってこう言った
「待て、待て、そこまで！
判決を下そう
では言い渡す

ナイチンゲールよ、おまえは良く歌った
だが、カッコウはコラールを見事に歌った
そして拍子を正確に保っていた！
わしの高き知性によって判決を言い渡す
高き知性によって！
これは一国の領土にも値するものだ
カッコウをよ、おまえに褒美を取らす！」
カッコー、カッコー、イーヤア！